

河内名所圖會前篇中  
石川郡富田林南河内都いにしへは富田芝とて、廣き野にてありしが、天正の頃、公命によりて、市店建續きて商人多し、特には水勝れて善れば、酒造る業の家數の軒をならぶ。

〔江家次第十二月〕御佛名

今夜羞。柏梨。左近衛府攝津莊名也、以小大盤以下以折敷居之、左近官人等取繼令主殿司居之、公卿候殿上者六位藏人以下居之、每折敷甘糟一坏入乳菓子二坏精進物二坏、箸臺一雙、空器一口也、公卿以下著殿上、近衛次將勸盃、藏人執三瓶子昇自小板數、四位勸大臣者繼酌、不過二獻云云、

裏書曰、柏梨昔府中將和氣某以攝津國之柏梨庄寄左近府以其地利充官人以下酒醪料、

〔公事根源十二月〕御佛名

十九日

けふより廿一日まで三ヶ日なり、或は一夜も例あり。○中柏梨の勸盃などいふ事有、それは左近衛府の領に攝津國柏梨莊といふ所より御酒を奉りて、殿上にて勸盃のあるなり。

〔攝津名所圖會河邊郡伊丹町名廿八、屬邑十二、河邊郡會の地にし

名產伊丹酒酒匠の家六十餘戸あり、みな美酒數千斛を造りて、諸國へ運送す、特に禁裏調貢の御銘を老松と稱して、山本氏にて造る、あるひは富士白雪は、筒井氏にて造る、菊名酒。○は八尾氏にて造る、其外家の銘を斗樽の外巻に印して、神崎の濱に送り渡海の船に積て、多くは關東へ遣す。

〔日本山海名産圖會一〕袋洗 新酒成就の後、猪名川の流に袋を濯ふ、其頃を待て近郷の賤民、此洗瀝を乞えり、其味うすき醴のごとし、是又他に異なり、俳人鬼貫、

賤の女や袋あらひの水の汁

愛宕祭 七月二十四日、愛宕火とて、伊丹本町通りに燈を照らし、好事の作り物など營みて、天満天神の川祓にも、おさくおとることなし、此日酒家の藏立等の大なるを見んとて、四方より群集す、是を題して宗因、

天も燈に酔りいたみの大燈籠